

グラスフェッドのすすめ

(有)シェパード 獣医師 松本大策

4: グラスフェッド向きの粗飼料

グラスフェッドをしたいのだけど、いったいどのような草を使えばよいのでしょうか？という質問をいただくことがあります。これ自体も、欲をいえばきりがなく、グラスフェッドの形態、販売戦略などでも異なってきます。

たとえば、舎飼いにして畑で草を作って与えるのであれば、栄養価が高く収穫やサイロ化しやすいものがよいと思いますし、以前お話ししたように最近ではトウモロコシのホールクロップサイレージも裁断型ロールベラーという機械で簡単にラッピングサイレージを作ることが出来るようになって、より効率的な飼料化が出来るようになっていきます。

また放牧主体で行くのであれば、さほど草丈のないものの方が牛さんは食べやすいです。草丈の高いものを用いる場合、あるいは改良草地などで草丈の高い牧草が生えている場合は、一度刈り取ってサイレージか乾草にして、再生草の草丈が低いうちに牛を放牧すれば利用出来ます。

山地放牧の際は、よく野芝が推奨されていますが、ご存じの通り日本は縦に長い国ですから、北海道に適した牧草と沖縄に適した牧草では全く異なります。今回巡回した沖縄の離島では、以前ローズグラスしかとれなかった牧野で、トランスパーラーが繁り、牧野にはジャイアントスターグラスが育っていました。これらの牧草は、沖縄本島では作りにくいなど、土壌を選びますが、栄養価も高く作るのもラクです。またジャイアントスターグラスは、窒素の要求量も高い、つまり堆肥をたくさん食うので、堆肥処理の面でも有利です。このような牧草の改良も、各関係機関の絶えまざる努力の結果なのです。本当に頭の下がる想いです。これまでは、肥料の要求の少ない飼料作物が改良



写真: 放牧地にもいろんな場所がある

の目標だったと思いますが、家畜の頭数が増えてきた昨今では堆肥処理が問題となっています。これからは、かえって窒素要求量の多い、つまり堆肥をたくさん必要とする植物が脚光を浴びてくるかも知れませんね。

野芝にもいろいろな種類があり、それぞれに耐寒気温や必要水分量、施肥などの特徴が異なるので、ご自分が放牧



地にしようと考えている土地の風土にあったものを選択していくことが大切なのですが、前述した斉藤牧場の斉藤あきらさんは、とてもすばらしいノウハウを持っていらっしゃる。「放牧地には、日当たりのよいところも悪いところもある、水はけのよいところも多少悪いところもある、牛糞などが落ちていると、窒素分も違う、だからいろんな種類の種をまぜこぜにしてまくといいんだよ」。これは、一見ムダでぐうたらなやり方なのですが、実は僕もこのような考え方は、牛さんにも当てはまると思っているのです。放牧場を実際に観察していると、このあたりにはこの草が生える、あの日影にはこの草が生える、落ちている牛糞の周りにはこの種類の草が生える、なんて事が分かってきます。それも自分の牧場の気温や降水量、日照量などの環境に適合したものが自分で生えてくれるわけです。これらの情報を記録していくと、ばらまいた種から「こういうところはこういう草を撒きなよ」って教えてもらえるわけです。せっかく自然な状況で放牧をするのでしたら、書物の知識も重要ですが、せっかくなので大自然が教えてくれることをしっかり受け止めていく方がうまく行くと思います。



写真:牛糞の周りは窒素分が多い

山地放牧の場合、少しずつ生えている草が変化していきます。牛さんが歩くことで、少しずつ開墾もされますし、牛の道が出来れば水はけの状況なども変わってくるからです。最初は葛のツルがびっしり覆っていて、人が歩くのも大変な場所でも、牛さんは好んで葛を食べてくれますから次第に葛は後退していきます。葛というのは漢方でも「葛根湯」という有名なお薬の材料ですし、デンプンも豊富に含んでいます。意外と牛さんの体調もよくなることが多いのです。笹が生えている場合も同様です。笹には銅なども豊富で、昔から日本では薬草のように用いられていましたし、僕自身もお世話になった馬喰(ばくろう)さんから「弱って見えていても笹を喰える馬は必ず助かる」という教えを受けたことがあります。

ある意味、放牧は牛さんとの共同作業ですから、知恵を使って素直に牛さんの意見も求める、つまり牛さんの状態や牧野、牧草などの状況をしっかり観察しながら物事を進める必要があるのです。

